

第14回地域医療現地研究会に参加して

— 地域包括ケアの広域的な取り組み・介護保険を中心に —

<香川県 豊浜町・財田町>



国診協理事／地域医療・学術部会委員

内藤紘彦（岡山県・熊山町国保町立熊山病院長）

平成12年度現地研究会は「地域包括ケアの広域的な取り組み～介護保険を中心に～」をメインテーマに、11月9日、10日の2日間、香川県豊浜町・財田町において全国から約300名が参加して盛大に行われた。公的介護保険制度が発足した記念すべき年に、広域的な地域包括ケアに先進的に取り組んできた三豊総合病院を中心とした国保直診の活動を現地で研修できたことは「直診のあるべき理想」を知ることになり、参加者全員が多大な感銘を受けたことと思う。

研修第1日目(11月9日)

[開講式]

豊浜町出身の戦後の偉大な政治家であった故大平正芳・元総理大臣にちなんだ「大平通り」に面した豊浜町文化会館で開講式が行われた。

今井正信先生は、主催者としての挨拶のあと、三豊総合病院組合保健医療福祉管理者としての立場で「国保直診ヒューマンプランに提唱されている保健医療福祉の連携の理念を推進してきた実情をみて欲しい」と挨拶された。続いて、高原晴美

・豊浜町長は歓迎の挨拶後、「戦後まもなくの昭和26年、37床の貧弱な病院から始まった組合立病院は、とくに医師の確保に悩まされたが、今井正信前院長、廣畑衛現院長を中心とした医療スタッフの努力で今日の519床の三豊総合病院へと発展した。現在、豊浜町では健やかで安心のある長寿社会をめざし、健康高齢者には『はつらつ健康づくり』を、介護の必要な人には『思いやり介護支援づくり』の施設整備を平成4年から始め、本年、一応完成した。これからはソフト面の充実を図ることである」と力強く語られた。

次いで、来賓の渡邊芳樹・厚生省保険局国保課長（代理：道上典子主査）、木幡浩・香川県健康福祉部長が来賓の挨拶を述べられ、組合立病院を構成する1市4町の首長さんたちの紹介等のあと、三豊総合病院の廣畑院長、財田町国保直営財田診療所の新鞍誠所長による施設の概要説明があった。

現地研究会の行われた三豊地区（観音寺市・三豊郡）は香川県西部に位置し、北東は瀬戸内海の「燧灘」に面し、南東部は讃岐山脈に連なる山に囲まれた約20km四方の範囲に1市9町があり、人口約14.3万人。雨の少ない温暖な瀬戸内海気候

写真1 三豊総合病院・わたつみ苑全景



で人情も豊かで、産業としては農業が盛んである。しかし、香川県内でも少子・高齢化の進んだ地区で高齢化率24.1%となっている。

この三豊地区の医療の中心が豊浜町の三豊総合病院であり、一方、過疎化・高齢化の進む財田町に平成10年度、国保直営診療所が開設され、この2つの国保直診間でみごとな病診連携がなされている。

設備の完備した総合病院を中心とした統合された保健医療福祉システムを持つ豊浜町と、小さな国保直営診療所や国保高齢者保健福祉支援センターを最近開設した財田町の地域包括ケアシステムの取り組みは、そのたどってきた歴史や施設、人的パワー等は対照的であるが、めざす方向は同じであり、今回の企画はさまざまな立場で働く私たちに十分な研修の場となった。

◆三豊総合病院

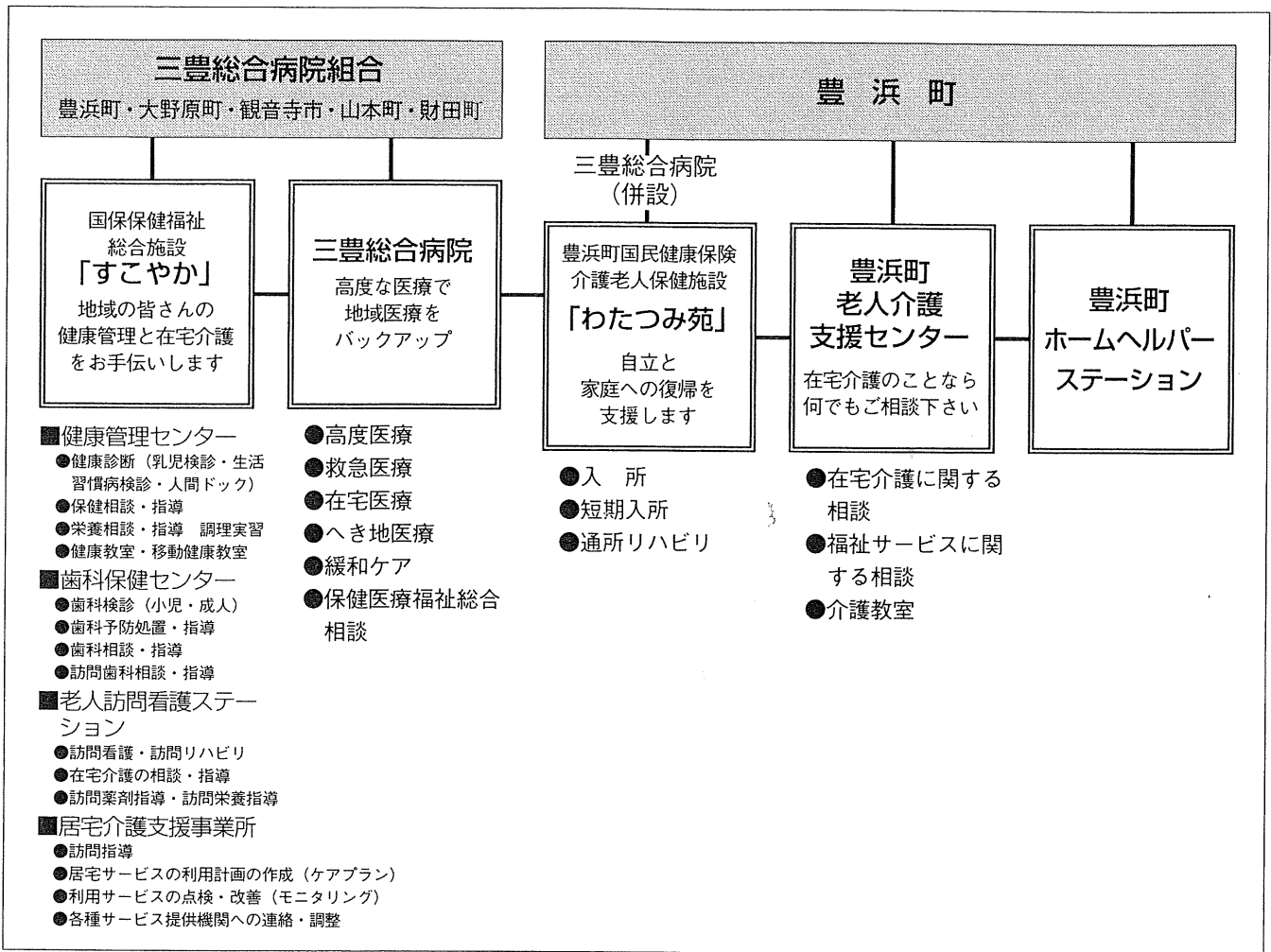
廣畑院長から病院の概要説明が行われた。開設は昭和26年で7か町村の組合立病院(病床数37床)として発足し、以後、さまざまな困難をのりこえて現在1市4町が経営母体となり、診療科目25科、一般病床515床(うち緩和ケア病床12)、感染病床4床を有する地域中核病院へと発展した(写真1)。

高度医療を行う臨床研修指定病院をはじめ各学会認定研修施設であるばかりでなく、保健・医療・福祉を統合した地域包括ケアシステムの構築に早い時期から取り組み、平成6年には国保保健福祉総合施設「すこやか」を併設して「健康管理センター」、「歯科保健センター」、「老人訪問看護ステーション」、「居宅介護支援事業所」を設置した。さらに平成8年、豊浜町老人保健施設「わたつみ苑」(80床)も併設された(図1)。廣畑院長が最後に「全職員が一丸となってどんな困難な事態にも情熱をもって対処する決意である」と述べたのが印象的であった。

◆財田町国保直営財田診療所

新鞍誠所長から説明が行われた。財田町は人口4,806人、高齢化率28.2%、独居老人世帯率6.4%と急速に高齢化が進む町である。医療過疎地でもあった財田町に平成7年、大西賢剛現町長が就任し保健・医療・福祉の充実を重点課題として町政を進め、議会の協力と町民の理解で平成10年、財田診療所が開設された。平成11年には三豊総合病院との「厚生省遠隔医療モデル事業」を開始、平成12年、国保高齢者保健福祉支援センター「健やかプラザ コスモス」を開設した(図2)。

図1 三豊総合病院組合の地域包括ケアシステム



診療所は無床であるが「かかりつけ医」として外来診療 (24時間対応)、訪問診療、総合相談事業に力を入れ、地域に密着した医療を行っている。患者数の増加にもかかわらず医療費は低下したことを新鞍所長は強調した。

◆昼休み

昼食は、会場前に張られたテントのなかで豊浜町婦人会のおもてなしで名物の「讃岐うどん」と「ちらしずし」を“さぬきの人情”と一緒にいただいた。本当においしい味であった。

[現地視察研修]

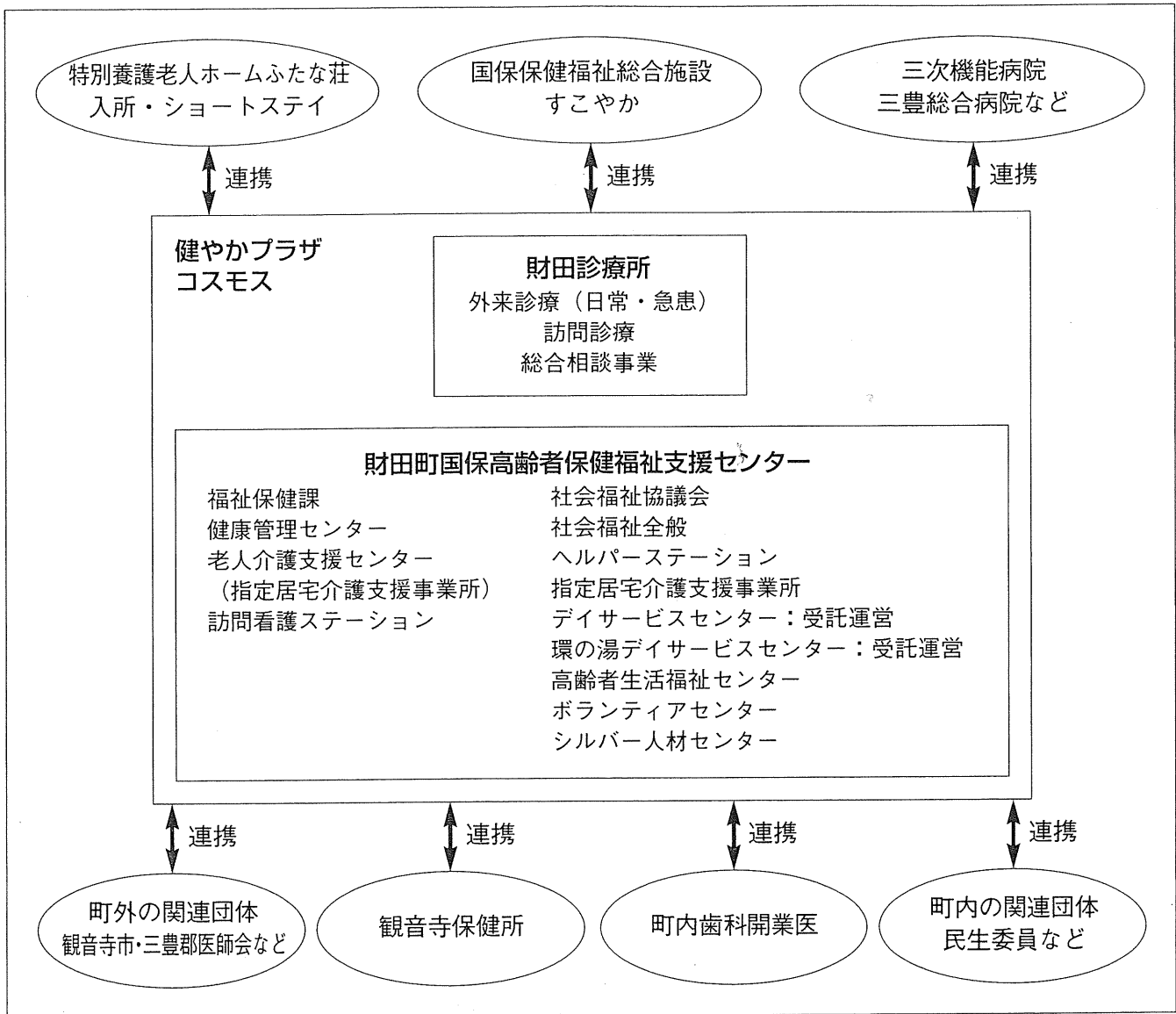
◆三豊総合病院

午後から10班に分かれ5台のバスに分乗して施設視察研修が行われた。私たちの班はまず三豊総合病院を訪れた。平成12年4月に新しく増築された、外来および緩和ケア病棟をもつ新病棟は5階建てでいろいろ工夫がこらされ機能的であった。私たちは病院の外来部門、緩和ケア病棟、リハビリテーション部門、地域医療部、総合相談室を訪れた。

○外来部門

平成11年度の1日平均患者数は1,358人で、このうち約10%は愛媛県からの患者であり診療圏の広がりがえる。紹介率は26.7%で毎年1%ずつ増えている。待ち時間短縮の手段として、コ

図2 財田町地域包括ケアシステム



ンピュータによる診療予約システム（予約割合68%）を採用している。

○緩和ケア病棟

香川県下で初めて開設された緩和ケア病棟は新病棟の最上階（5階）にあり、フロアは広く、花や草木でいっぱいであった。12床全室が基準の倍以上の広さをもつ個室であり、ベランダからは三豊平野や瀬戸内海を望むことができ、とても明るい雰囲気であった。

勤務する看護婦は本人の希望を含め、十分にそ

の適性を検討したうえで配置されているせいか、案内していただいた人たちは落ち着いて、おだやかで、終末期を過ごすための環境に配慮がなされ、これからの医療の進むべき方向を示している。

○リハビリテーション部門

専門医師が常勤し、総勢18名のスタッフで独立したリハビリテーション科として機能している。院内の急性期患者の医学的治療、糖尿病患者の運動療法、慢性呼吸器障害患者の在宅酸素療法生活指導や、併設老人保健施設での維持期・慢性期の

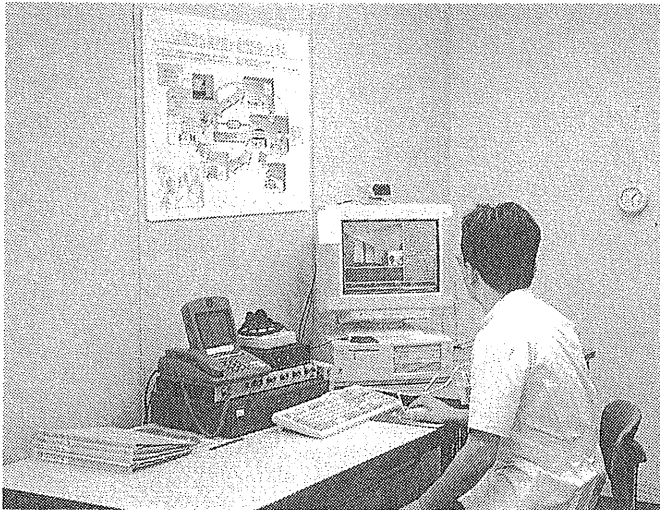


写真2 遠隔医療システム



写真3 わたつみ苑の「ちょうさ」の模型

通所・訪問リハビリテーション、そして健康管理センターと協調しての小児肥満予防等、その守備範囲は広く、また高度である。

○地域医療部

高度の医療が行われている一方、国保病院としての大切な活動拠点である地域医療部を興味深く見学した。スタッフは医師4名、歯科医師1名など総勢30名であり、これだけの人がいれば診療所が一つできるマンパワーであり、地域包括ケアに取り組む姿勢が理解できる。

在宅ケア・訪問診察の診療範囲は三豊郡内にとどまらず、愛媛県川之江市、伊予三島市など広い範囲に及んでいる。訪問件数（実患者数）は毎年増加し、平成11年度は200件を超え、悪性腫瘍の患者が3分の1を占め在宅ターミナルケアも積極的に行っている。病状の不安定な患者には、テレビ電話による遠隔医療システムを導入して健康状態のチェックを行っている。

昭和61年にへき地中核病院に指定されて以来、へき地巡回診療を行っているが、最近では整形外科、眼科も診療に加わり、さらに歯科検診も行われている。

○総合相談室

保健・医療・福祉の総合相談窓口として病院玄関に設置されて、地域における病院の窓口としての役割を果たしている。介護保険のスムーズな運用には気軽に利用できる、このような相談室はますます必要とされるであろう。

◆国保保健福祉総合施設「すこやか」

次いで、併設された国保保健福祉総合施設「すこやか」を訪れた。

○老人訪問看護ステーション

保健婦3名、看護婦3名、介護福祉士2名、理学療法士1名の総勢9名のスタッフで、24時間体制のケアを提供している。大規模な総合病院をバックにしているため、悪性疾患、呼吸不全、神経難病等の従来であれば在宅療養困難な症例が3分の1近くを占めている。平成11年度の訪問者128名中7割が在宅死であった。

介護保険が始まり、自己負担が増し、競争原理がもちこまれた訪問看護であるが、利用者は前年に比し1～1.5割増加している。

○居宅介護支援事業所

病院併設の事業所であるため利用者は医療依存度が高いのが特徴である。院内の多くの職種のスタッフと連携して仕事を進めている。

○健康管理センター

先に紹介した地域医療部のスタッフが中心となり、地域住民に対して健康教育活動を行っている。健康教育活動として、生活習慣病、呼吸器疾患、糖尿病、小児の肥満などの健康教室、歯科検診を行い、季刊誌『すこやか』新聞の発行や「健康フェア」を開催している。各種健診活動も積極的に行っている。

○歯科保健センター

要介護者に対する歯科的対応は平成5年より開始されたが、平成8年の歯科保健センターの設立で本格的な活動が始まった。在宅要介護者、高齢者施設入所者、歯科を標榜しない病院の入院患者に訪問歯科健診、指導、治療などを専属の歯科医師、歯科衛生士が行っている。予防歯科活動にも力を入れ、学童・妊産婦から高齢者まで生涯とおした歯科保健活動を充実させている。

○遠隔医療システム

平成9年度厚生省遠隔医療モデル事業の指定を受けている。遠隔診療支援システムは音声・画像に加えて、血圧、動脈血酸素飽和度、脈拍数、心電図、聴診音を測定・伝送できる(写真2)。在宅ケアに遠隔医療を導入することで介護者の不安の軽減につながり、訪問看護の質の向上に活かされている。

◆介護老人保健施設「わたつみ苑」

次いで、私たちは隣接地に平成8年に設立された介護老人保健施設「わたつみ苑」を訪れた。豊浜町が設置し、三豊総合病院へ業務委託している。開設時、入所80人(うち短期10人)、通所20人、痴呆性加算承認28人でスタートしたが、平成12年に老人介護支援センター、デイケアフロア増築後、通所リハビリ定員を40人に増員している。

施設は非常にゆったりとしていて、フロアの一部の天井は吹き抜けになっていて、豊浜町の秋の

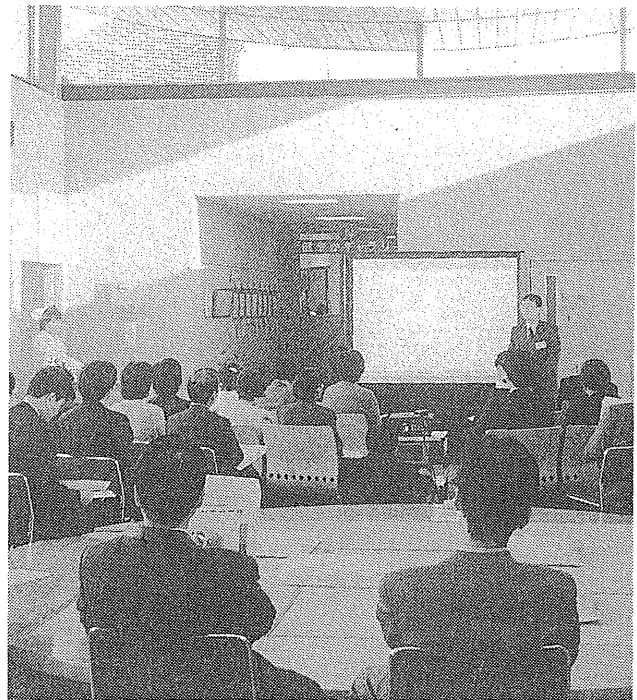


写真4 財田診療所での研修風景

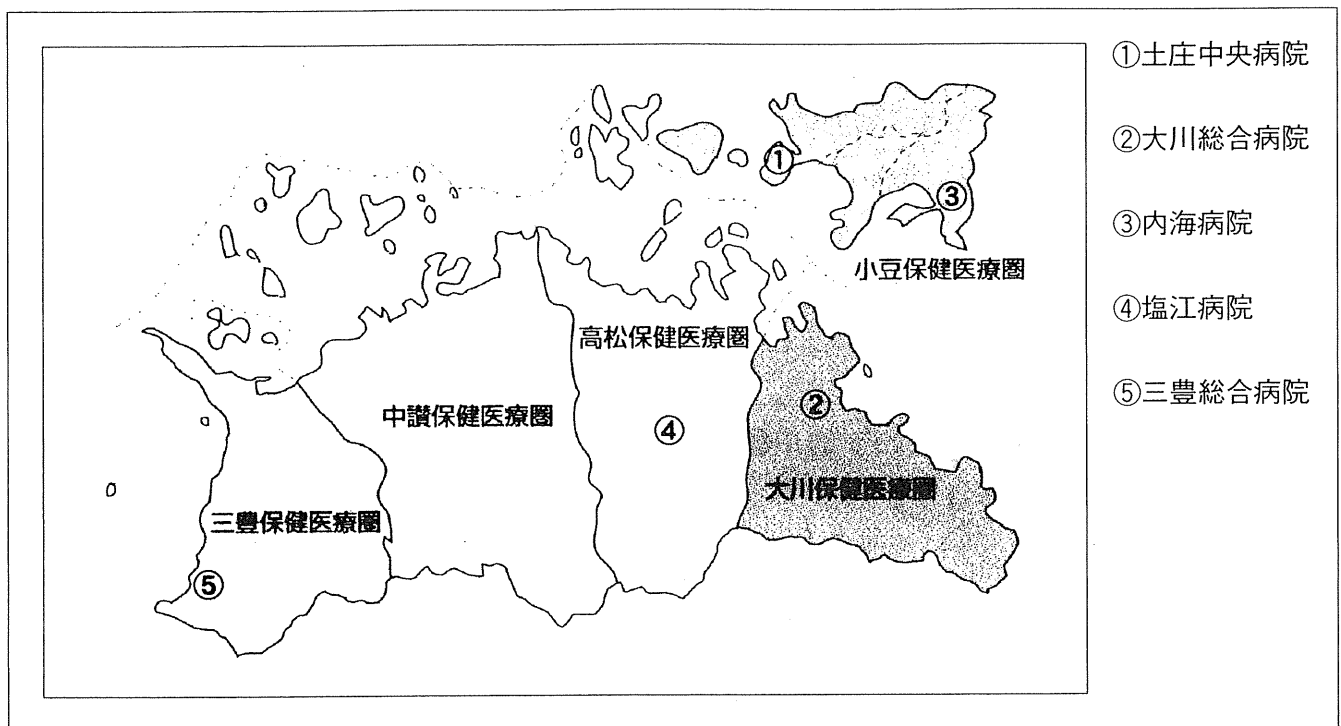
勇壮華麗な「ちょうさ祭り」に使われる「ちょうさ(太鼓台)」の入所者たちの手づくりになる小さな模型が飾られていた(写真3)。病院併設型の施設のため多くの職種の職員が兼務し、連携をとってサービスを提供している。併設の老人介護支援センター、ホームヘルプステーションや病院の訪問看護ステーションも協力している。施設を見学して、とくに機能訓練に力を入れていることが感じられた。町の介護保険相談室、社会福祉協議会とも連携して介護保険のスムーズな運用が行われていた。

◆財田町国保直営財田診療所

豊浜町の施設見学の後、15kmほど離れた財田町へバスで移動した。財田町に近づくにつれて財田川沿いの道は山道になった。この道は四国山脈を越えて徳島県池田町へと連絡している。立派な町役場の隣に木の香のにおう瀟洒な診療所の建物が目に飛び込んできた。

木をふんだんに使った診療所は待合室の天井が

図3 香川県の二次医療圏



高く、曇も敷かれ、明るい雰囲気の中私達は説明を受けた(写真4)。

職員は常勤医師1名、非常勤医師(三豊総合病院から派遣)2名、看護婦3名、事務1名である。診療科目は内科、外科、小児科で、1日外来件数74.4人、1か月の訪問診療・往診は65.6件、訪問看護は4.3件、その他、各地区に出向いての健康教室など保健事業にも力を入れている。

三豊総合病院との「遠隔医療モデル事業」の実際を見せてもらったが、CTなどの画像伝送や診断に威力を発揮していて、とくに参加者の質問が多く出されていた。

開設されてまだ2年余であり、スタッフ全員はこれからの課題に向けやる気十分である。

○国保高齢者保健福祉支援センター

診療所に併設されている支援センターには、町の保健・福祉関係の職員が集まり、一つ屋根の下で仕事をしている。町役場とも渡り廊下でつながり、「健やかプラザ コスモス」と名付けられたこ

の総合施設で介護保険のすべてが行えるしくみを作り上げている。

「国保直診ヒューマンプラン」に基づく地域包括ケアの理想的な形をみる事ができた。

【交流会】

多彩で充実した第1日目の研修が終わり、18時半から観音寺グランドホテルで交流会が開かれた。大西賢剛・財田町長の「さいた町は古代から財だ(たからだ)の里といわれた町で、全国からよく来ていただいた」というユーモアあふれる歓迎の挨拶、そして中村仁・山形県最上町長(国診協開設者委員会委員長)の乾杯の音頭で会は始まり、瀬戸内の新鮮な幸、讃岐の地酒に囲まれて、みんな楽しくすごし交流を深めた。

■ 研修第2日目(11月10日)

豊浜町文化会館で「全体討議」が行われた。香

表 三豊地区広域市町の要介護（要支援）認定者数

平成12年6月現在（香川県資料）

	総数	要支援		要介護1		要介護2		要介護3		要介護4		要介護5	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
観音寺市	1,150	204	17.7	349	30.3	162	14.1	143	12.4	157	13.7	135	11.7
高瀬町	472	81	17.2	124	26.3	78	16.5	59	12.5	60	12.7	70	14.8
山本町	267	48	18.0	64	24.0	46	17.2	28	10.5	37	13.9	44	16.5
三野町	198	14	7.1	54	27.3	37	18.7	30	15.2	36	18.2	27	13.6
大野原町	311	28	9.0	97	31.2	47	15.1	41	13.2	58	18.6	40	12.9
豊中町	298	45	15.1	79	26.5	46	15.4	44	14.8	48	16.1	36	12.1
詫間町	384	44	11.5	120	31.3	65	16.9	39	10.2	66	17.2	50	13.0
仁尾町	214	27	12.6	56	26.2	26	12.1	35	16.4	35	16.4	35	16.4
豊浜町	281	33	11.7	94	33.5	66	23.5	40	14.2	31	11.0	17	6.0
財田町	160	37	23.1	48	30.0	19	11.9	16	10.0	22	13.8	18	11.3
三豊広域計	3,735	501	15.0	1,085	29.0	592	15.9	475	12.7	550	14.7	472	12.6
県計	23,952	4,293	17.9	6,303	26.3	3,965	16.6	3,211	13.4	3,313	13.8	2,867	12.0

川県国保診療施設協議会会長で土庄中央病院の日野博夫院長を座長に、「地域包括ケアの広域的な取り組み～介護保険を中心に～」をテーマにして香川県内5つの二次医療圏のうち4医療圏から4人の演者が発表した（図3）。

まず、大川総合病院（一般226床、精神190床、感染症4床、結核5床）の土光荘六院長が発表した。病院は大川郡（人口約10万人）の中核病院であるが赤字経営の解消、5町の合併（東さぬき市）予定による新市民病院への移行問題、改築・新築問題等、課題が多いと述べ、病院経営から見た地域包括ケアについて報告した。

内海病院（一般179床、結核13床、伝染病20床）の冨田忠孝院長は、小豆島という離島が抱えるさまざまな問題点を提起したが、島民の「内海病院後援会」等に支えられ、今日ではさまざまな施設も整い、介護保険に対応できていると述べた。

塩江病院（一般95床）の間島是武院長は、高齢化率34.1%で過疎化（人口3,725人）の進む山間地の社会的資源、人的資源、財源の限られた小さな町での地域包括ケアの困難さについて発表した。

町づくりの中心に病院をおいて活動している姿勢が強く感じられた。小病院に勤務する筆者に共通する課題である。

三豊総合病院地域医療部の大原昌樹医長は、すでに昨日来研修してきた三豊地区の医療、保健、福祉の広域的取り組みについて素晴らしい発表を行った。しかし、介護認定審査会を広域で設けて審査しているが（表）、サービス担当者会議、地域ケア会議とも開かれていない市町があり、国保直診としてさらに各市町と連携する必要があると問題点を指摘した。重度の要介護者が豊浜町、財田町に少ないことが注目される。

厚生省・国保課の道上主査と国診協富永芳徳副会長の適切な助言があり、熱心な討議は終了した。

たちまちに過ぎた2日間であったが、介護保険スタートの年にふさわしいメインテーマのもとで、充実した現地研究会であった。

*

最後に、このような素晴らしい研究会の準備、運営を行ってくださったすべての関係者の方々に、本誌面を借りて厚くお礼申し上げます。